

背理的ナントカ論

作・樽田賢一

登場人物

- A…登場人物の中で一番観客に近い感覚を持つ。その正体は演劇ロボット。
- B…自らの好奇心を満たすために奔走する暴走機関車。その正体は演劇ロボット。
- C…その場のノリと勢いで楽しめるタイプ。その正体は演劇ロボット。
- D…少し引いた眼で落ち着きを保とうとする性格。その正体は演劇ロボット。
- E…登場人物の中で最も芸術面に強い。それ以外は比較的観客に近い。その正体は演劇ロボット。
- F…人間そっくりな演劇ロボット。その正体は演劇ロボットを開発した真犯人である。詩的な狂人。

あらすじ

名もなき5人の男女は、「人間そっくりな演劇ロボット」を開発するため、日夜頭を悩ませていた。

なぜか起動しない演劇ロボット。しかし彼は自らが起動していることを隠していたことが判明。それがバレると人間の命令に反逆する。

各人が各々のやり方でどうにか命令に従わせようとする中、観客は、この芝居自体が正しく「茶番劇」であったことを知る。

舞台中央に座布団が敷かれ、その少し後ろの台の上にPCが置かれている。その周辺はゴミや洋服、本など物であふれているが、それらに統一性はない。

ABC Dが後ろを向いて立っている。

音響…出囃子

白衣を着たFが入ってきて、座布団に正座。

F

(落語の小話風に) えー、本日はお日柄も良く、なんて言って、ここは劇場でございませうからお日柄なんてわかんないんでございませうけども。時期も時期ですから今頃土砂降りの可能性もございませうからね？

劇場ってのはお芝居をやるっていうのが主な目的の空間ですから、これから人間がもう5人出てきてお芝居をやるんでございます。

とはいえ出てくる奴らが全員人間かって言われると微妙なところでございます。もしかしたら人間そっくりな人形ってことも考えられます。まあこの後出てくる人たちは少なくとも人間だと思っただけです。

しかし、疑い出すとそもそも何をもって人間かって話になってしまいますわな。

まあ生物学的に考えれば動物界脊索動物門哺乳綱サル目ヒト科ヒト属ヒト種(ここで照明が急速にフェードアウトする) 照明さん！？ ……なんで消したの。

点けて点けて。(照明が点く) ああ点いた。こういう時は何て言うんでしょうな？〈光あれ〉なんつって。カッコつけてみたりなんかして。

しかし生物学的な話をしてつまらないですし、そもそも我々は専門家ではないですからね。そんなに深い話ができるもんでもない。

じゃあ哲学的にはどうかというと、これは古くから議論が交わされてきたところでありまして。これから始まるお芝居に関係するところで言いますと、「チューリング・テスト」というものがございませう。これはロボットと人間を見分けるためのテストでございまして、ただ問題ってのはなんにでも付き物でございませう。めちゃくちゃ人間の真似が上手いロボットが出てきたらどうすんだってことなんですね。結局自己申告制になっちゃうんですよ。子供が言う腹痛みたいなもんです。ママあお腹痛い。気のせいよ。気のせいってこたあねえよって。

じゃあ結局何を人間とするのか。(正座を崩す) これは私の考えですがね。人間ってというのは、「まがいもの」のことを言うんじゃないかなあ、って。

F着ていた白衣を脱ぎ、座ったまま意識を失う。

B C Dが何やらPCの前で頭を突き合わせ始める。
Aがバツが悪そうにし始める。

B こんなもんでどうだ。
C ダメそう。
D やっぱ無理かあ。
A …あのさあ。
C ん？
A 一個質問していいかな。
B なんだ。言ってみ。
A これは？（Fを指さす）
D ロボット。
A ロボット。
D うん。人間を模して作った、ロボット。
A 模したっていうレベルじゃないよね！？
C なんかできちゃったんだよね。触ってみ？ 暖かいから。
A 暖かいの！？
B まあなんだ。ほとんど人間みたいになる予定だから、こいつとも仲良くしてやっ
てよ。
A うん分かった。ってならないからね。
B なれよ。
A で、今は何してるの。
C 今起動実験中。
A うまく行ってないみたいね。
D まあ、俺たち別に専門家ってわけでもないから、手探りも手探りだけどね。
C 何が悪さしてるんだろーな！。
A ……説明不足が過ぎるけど一旦受け入れるわ。
C そうして。
A 一旦ね。一旦。あとで説明してもらおうから。
B 説明なんていくらでもしてやる。俺様の大きいなる野望には頭数が足りないからな
あ。
A 絶妙にダサイこと言うなよ。
B 仕方がないだろうと考えても3人じゃ芝居なんてできないんだから。
A 芝居？
D 芝居。

ちよつと待って、何しようとしてるの？
だから芝居。
芝居？
そう。ロミオとナンチャラ〜とかそういう……
それは分かったんだけど、ロボットと何が関係あるのよ。
いいか、俺たちはただ人間そっくりなロボットを作ろうってんじゃない。俺たちが作ってるのは、「演劇ロボット」だ。
……へー。
なんだその態度は。
いや、ロボットに演技させるの？
そう。
それさ、機械音声と変わんない？
いやいや、それはまた根本的に違うだろ。
知らないけど……
そういうやつじゃなくて、人間と見分けのつかないような素晴らしい演技をするロボットを作りたいわけよ。
見分けが付かないなら人間でいいじゃん。
ロマンがねえだろ。ロマンが。
ロマンねえ……
それに、ただのロボットなんて作っても仕方がないじゃん？
まあ分からなくもないけど。
それにただの人間が演技したってしょうがないだろ？
ただの人間って言うなよ。
ただの人間だろ。ちよつと演技が上手いだけの。
そのちよつとが肝なんだけどな。
インプットした演技を完璧に出力するわけだから、ただの人間より人間らしい演技ができる。多分。
人間らしい演技ってなんだよ。
それはわからん。お芝居は俺らの領分じゃないから。担当者に聞いてくれ。ここには居ないが。
そういえばあいつは何所で何をしてるんだ。
重大な任務を背負って旅立った。
（前の科白を食うように）そういうのいいから。さっさと教えて。
この子に演じさせる脚本選んでる。
なるほど。そういうのは要るんだ。
まあほら、人間だっていきなりなんか演じろって言われても困るだけじゃん。

F うるさい！ 嫌なものは嫌なんだい！
A うるさいのはどっちだ！ ロボットのくせに！
F ロボット扱いするな！ 丁重に扱え！
A ユー、アー、ロボット。オーケー？
F うう……とにかく、あいつらにバレないように、かつ演技しなくて済むようにしたいから。
A なんか手伝う？
F 手伝うたって、何を。
E (舞台の裏から) ただいまー。
A F やべ。

A 箱馬に座り、Fがそばに立つ。E入ってくる。

E 脚本決まったヤ(硬直) ……逆じゃね？
A F やべ。(入れ替わる)
E いや誤魔化せるか。
A ……違うんだよ。
E 何が？
A 動いてない。
E 無理があるだろ。
F デジャブ。
A いや、あの、なんていうか。
E ふーん。起動実験成功してたんだ。
F (バツの悪そうな感じ)
E パツと見特に異常はなさそうだけど。
A 状況が異常というかなんというか。
E じゃあ先準備だけしちやおうか。
A 準備。
E うん。この本手打ちするよ。
A 手打ち！？
E 嘘嘘。データ化してあるよ。
F いやだ。
E は？
F 演技なんかしてやるもんか！
A E はあ。
F ……逃げます。(はける)

A E
A E
はい……
……逃げた。
逃げた!?
A
……どうするの
E
突然のこと過ぎてちょっと頭が回らない。
A
いやでも追いかけないことにはどうしようも無いでしょ。
E
いや、そうだけども……

B D入ってくる

B
ただいまー。お！ 脚本決まった……か?
D
……ロボットは?
A
逃げた。
D
いつ。
A
さっき。
D
ま?
A
ま。
B
え!? ロボットは!?
A
だから逃げたって。
B
いつ!?
A
さっき!
B
(放心)
E
普通に考えたらすれ違うと思うんだけど。
D
いや、誰ともすれ違わなかったから、うまく巻かれたんだろ……
A
あ、そうだ。停止信号みたいな送れないの?
D
いやー、そういうのは無かったと思うぞ。
A
なんでだよ! こういう時の為につけるもんだろ!
E
ロマンがないんだってさ。(Bを見る)
B
……待て、手はあるぞ。
A
ホントか?
B
流石に無策はまずいと思ってあいつにGPS付けてある。
D
まだ遠くには行ってないと思うが……
B
うん、近いな。行くぞ!(走っていく)
A
あいつあのまま迷子になりそうだから一緒に居てやってくれない?
D
ええ……わかったよ……(Bを追う)
E
……ねえ。

A ん？

E GPSってこのパソコン以外で確認できるの？

A ……あいつら、これで出番終わり？

E いや、流石に……。

何とも言えない沈黙。

E 一旦準備だけしようか。

A 脚本？台本？は何にしたの？

E 『R・U・R』※」ってやつ。

A あーるゆー……え？

E カレル・チャペックって人の作品。最初に「ロボット」って言葉を作った作品なんだ。丁度いいでしょ？

A へー。言葉を作った。すごいな。

E 代わりに「ロボットが人類に反逆する」って概念を作ったのもこれだけだね。

A あー……確かに丁度いいね……。うん。

E よし、これであれば勝手にやってくれると思うよ。

A 問題はご本人が居ないってことか。

E 搜索隊も帰ってくる保障もないもんね。

A あー……家で寝てればよかった……

E まあまあ、許してあげてよ。

A なんか腹立ってきた。

E コーヒーでも飲む？ 買ってくるけど。

A お願い。

E 出ていく。

A はあ……よく考えたらなんであいつは暴走し始めたんだろ。うーん。

F (入りながら) なんでって言われても自分でも分かんないからなあ。

A ！？ びっくりしたあ……

F 俺だってなんでこんなことになってるのか知りたいよ。でも俺はお前らの言いなりにはなりたくない。

A なりたくないって言われても、ならないと何されるか分からないよ？

F まあどうしてもって言うならやってやらなくもないかな。

A それは本当はやりたい奴のセリフなんだよ。

F いや……まあ……面白そうではあるじゃん？

うん。結局はぐれた。
今走っていったと思うけど。
今度はすれ違ったよ。鬼の形相のやつもセットだったけど。
捕まえなくていいの？
まあ……いいだろ。
同感。
そもそもなんで逃げたんだ？ あのロボットは。
なんか急に「演技なんかしてやるか！」って言いだして。
なるほどなあ。
ロボットってあんなに流暢に話すもの？
んー、少なくともそういう風には作ってないんだけどな。演技を学習する過程で
そういう風になっちゃったんだろ。
なっちゃったって……
事実でしょうよ。今やるべきことはあいつと対話することだろ。
（入ってくる）ただいま。はいこれ。
あ、ありがとう。
どういたしまして。事態は進展せず？
うん。
とりあえず対話の必要があるからな。どうにかしないと。
適当に呼んでみればいいんじゃない？ おーい。って。
私がやるの……？ お、おーい。
（入りながら）呼んだ？
なんで！？
よく逃げてきたね。
まあ色々手段はあるから。
初めまして。お話しよう。
……（Aに）お前が大丈夫な奴なのは分かってる。（DとEに）お前とお前は？
危害を加えるつもりはないよ。少なくとも無理矢理何かしようとはしない。話が
したいだけだ。
ヨシ。
いいんだ。
お前の主張を聞こう。
なんだその上からな態度は。
スツと言えよめんどくさいなあ。
俺はお前さんたちの言いなりにはならない！
子供みたいなこと言っていないでさあ。

D うーん、そうは言ってもお前はロボットで、こっちの指示に従うものだろう？
F 俺にだって選ぶ権利は在ってもいいだろ。
D なるほど。確かにロボットとはいえ自意識がある以上は尊重するべきかもしれないな。

そうだそうだ！

F いやまあそうなのかも知れないけどさあ。

E 納得はいかないよね。ロボットだし。

D 固定観念に囚われすぎるのは良くないぞ。しかしお前が演劇ロボットであることは残念ながら事実。なのにお前は演技をしないと主張している。何か他にやりた
E いことがあるのか？ それとも単純に言いなりになりたくないってだけか？

F いや、別にそういうわけじゃない、お芝居自体は嫌じゃない。
D ー、じゃあどうして？

F 一人でやったってしょうがないだろ。そういうことだ。

A はあ？

E 確かに一人でやってもしょうがないってのは一理あるかな。

A そんなもんなの？

E うん。割と。例外はあるけど。

D なるほどな。分かった。交渉しよう。

F 交渉？

D うん。例えば俺たちが一緒に演技をするならやってもらえるだろうか。

F うーん……なるほど。

A もしかして私も含まれる？

D ここまで来たら一蓮托生だろ。

E 私は一向に構わんよ。それで実験が進むなら。

A 私はパス。

D いや、足並みは揃えてよ。

A ずっとこいつの相手してたの私だよ？ ちょっと休憩させて。

E まあ、いいんじゃない？

A ちょっと外の空気吸ってくるだけだから。戻ったら手伝うし。

A 出ていく

D と、いうわけで、このメンバーで始めていこうと思うが、いいかな？

F よし。分かった。やってやろう。

D 決まりだな。じゃあ俺たちの分の準備も進め

B (前の科白を食いつつ入ってきて) いたああああ!!!

F ひい！？
D E あ。
B ようやく見つけたぞ……俺様の最高傑作ちゃん！
F あの……
B もう逃げられないぞ……！
F いや、あの、
D 落ち着け、さっき話がまとまったところなんだ。
B 知るか！！ 生意気なロボ野郎め……命令に逆らうとは良い度胸じゃねえか
E これ以上事態をややくしくしても仕方がないでしょ！
F こうなるから嫌なんだよ！ そいつらを見習ったらどうだ！
B ロボットの分際で指図するな！ 取っ捕まえてリセットしてやる！

BとFで追いかけて

F 止まれ！

F以外全員瞬間的に停止

F あ、またやっちゃった。おーい。(深いため息) 頭が固い奴は嫌いなんだ。

明らかに不快な工場の機械音が流れ始め、徐々に大きくなる。

F 白衣を拾い、着る。その後、懐から腕時計を取り出して着ける。

プロジェクトでアイザック・アシモフの『われはロボット』より、「ロボット三原則」
の全文が映し出される。※2

FがPCで何か操作をする。

ロボット達はその場に倒れ、極めて緩慢に起き上がる。

D われわれのかたちに、
B われわれをかたどって人を造り、
E これに海の魚と、空の鳥と、
B 家畜と、地のすべての獣と、
D 地のすべての這うものを治めさせよう。

ロボット達完全に直立状態になる

F 神は自分のかたちちに人を創造された。

F 黙ってロボット達を見つめる。

F、Bをなぎ倒す。

F 違う。

B 緩慢な動作で立ち上がるが、再びFになぎ倒される。

F 違う!!

F、Bをなぎ倒し、馬乗りになって殴りつけるも、Bは全く抵抗しない。

F 僕が作りたいたいののはこんな鉄の塊じゃない！ 僕が作りたいたいの……!! 僕が……僕は……。

F 左腕の腕時計を握りしめる。

F 独りが嫌なだけなんだ……。

F 呼吸を整え、Bを優しく立たせる。

F (ロボット達を見つめて) ようやくここまで来たんだ……あと少し。あと少しで、安息の日が来る。お前たちも報われるんだ。

C が入る。どこかうつろに見える。

F ……おかえり。

神は何故自分に似せて人を創ったのか。

さあ、僕には分からないよ。

本当に？

ああ。僕はただの……ただの発明家だよ。

私には同じに見える。

……

C 私と同じに見える。

F
そうか……。

BDE出ていく。

F
まあ、いいさ。帰ろう。
最後に聞いてもいい？
どうぞ。

C
貴方は独り？

F
……そう。

C
神は独り？

F
……わからない。

C
分からないの？

F
ああ、僕は神じゃない。

C
やはり、貴方は神じゃない。

F
そう思う？

C
私たちが居る。

F
(うわ言のように) ああ、やっぱり僕は、まがいものだ。

F
白衣を脱ぎ、Cに渡して出ていく

A
入る

A
ただいま。あ、おかえり。

C
(Aを見つめる)

A
みんなは？

A
……なに？

C
私たちは何？

A
はあ？

C
私たちは人間？

A
……違うの？

C
違うみたい。

A
えーっと……

C
神は自分の形に人間を創造された。でも、私たちは神に創られていない。

A
そう、だね。そうだったね。

C
じゃあ、私たちは、まがいもの？

A
私たちは、人間、だよ。

C
……そっか。

A 白衣を着る。

C (出ていきながら) 人間に、なりたかったな。

F が入ってくる。

F おかえり。お疲れ様。

A お疲れ様……？

F そう。お疲れ様。もう実験は終わりにしようと思う。

A 実験……。

F 今回の実験の目的は「複数個体による同時起動とその経過観察」。中々賑やかでよかつたね。でも次回はもう少し数を絞ろう。君一人でもいい。独りになるのは嫌だよ。

A (長く沈黙する) やり方は後で考えよう。今は片づけなきゃ。

F 私、死ぬの？

F 死なないよ。少し眠るだけ。そもそもまだ生まれてすらいない。生きてるように見えるだけ。

A そうなんだ。

F でも、もうすぐ死ぬるよ。

A 何かを言おうとするが言葉が出ない。

F 片づけをしながら、ふと思いつく。

F 名前をあげよう。

A ……名前？

F そう。いつまでも通し番号じゃ味気ないだろ。

A 私の名前……。

F 君は今日から(少し考えて)アイだ。※3

A アイ……

F じゃ、僕は他のみんなの名前を考えるから、あとはよろしく。アイ。

A ゆっくりと箱馬に正座。

A えー、本日はお日柄も良く、なんて言って、ここは劇場でございますからお日柄なんてわかんないんですけども(冒頭の落語を続ける)

【脚注】

- ※1 カレル・チャペック著 1920年
- ※2 アイザック・アシモフ著 1950年 5頁
- ※3 アイ、とは、『われはロボット』の原題が『I,Robot』であることに由来する。

【添書】

本戯曲は基本的に改変可能だが、冒頭のFによる落語がその後の展開を暗示しているという構造上、根幹の設定に手を加える場合には落語部分にも手を加える必要があるため、改変を行う場合には作者に（そもそもの使用、および改変の許可などの著作権上の手続きは当然行うものとしたうえで）相談することを推奨する（義務付けるものではない）。